

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・ 教育委員会等	実施機関名・連携機関名 実施機関：山口大学教育学研究科（教職大学院）、教職員支援機構（NITS）山口大学センター 連携機関：山口県長門市協育委員会、山口県教育委員会
コラボ研修プログラム	事業名：NITS・山口大学教職大学院・長門市教育委員会・山口県教育委員会コラボ研修 「学校を核とした地域ぐるみの防災教育カフェ」
支援事業報告書	研修等名：NITS・山口大学教職大学院・長門市教育委員会・山口県教育委員会コラボ研修 「学校を核とした地域ぐるみの防災教育カフェ」 開催日時：令和6年11月9日13:00～10日12:00（第1日：9日、第2日：10日） 開催場所：第1日 山口県油谷青少年自然の家（〒759-4505 山口県長門市油谷伊上 1068 番地） 第2日 長門市「青海島共和国」（〒759-4106 山口県長門市仙崎 2874 番地） 参加人数と属性：（延べ人数）94人 学校関係者（教職員、学校運営協議会委員）41人、学生25人、 指導者5人、教育委員会関係者3人、施設職員4人、大学教職員16人

#### 目的：

自然災害大国に生きる子どもたち、国民一人一人にとって、学校、集団や地域としての防災力を高めることは不可欠であり、地域の教育・人材育成機能を有する学校や教職員には、子どもたちに対する防災教育の充実に加えて、地域ぐるみの防災教育を牽引できる力量の向上が求められている。

そこで、地震や津波に対する強い危機意識と実効的施策をもち、高い地域教育力を有する山口県長門市を会場に、教職大学院と教職員支援機構山口大学センターが、防災教育に関する2日間の「カフェ」を行うことをとおして、地域ぐるみの防災教育を牽引できる教職員の力量形成を図るとともに、地域課題の解決に貢献する。

#### 内容：

##### 【第1日（11月9日）山口県油谷青少年自然の家】

・ 教職大学院の佐々木司専攻長が開会の、会場となった油谷青少年自然の家の田村洋子所長が歓迎の挨拶に行った後、NITS とコラボ研修事業（NITS カフェ）の紹介、「山口県教員育成指標」との関連の確認、研修行事の目的、内容構成や研修形態の説明および諸連絡を行った。

・ 続いて、岩手県立図書館の森本晋也館長（岩手大学地域防災研究センター客員教授）が、「学校や地域における防災教育のあり方 ～現状や課題をふまえて～」と題した専門（基調）講演を行った。能登半島の状況報告、東日本大震災の教訓、実効性のある防災教育の推進で構成されたが、釜石市立釜石東中学校で防災教育に、東日本大震災後には岩手県教育委員会で復興教育に、そして文部科学省安全教育調査官として学校安全に携わった講師が、能登半島地震やその後の実相も含めて語り、「事件や事故、災害が起きてから学校安全に取り組むのではなく、普段から学校安全に取り組むこと、学校を核として地域ぐるみで取り組むことや学校安全を見直して実効性を高めることが大切」であることを学ぶ貴重な機会となった。



・ その後、「学校を核とし、地域と一体となった防災教育の取り組み」をテーマとし、長門市立日置中学校の櫻井敬子校長と長門市教育委員会の藤本悠司主任（社会教育主事）が実践発表を行った。防災教育推進に向けた組織づくり、生徒が主人公となる取組の開発、公民館がコーディネート機能を担う学校・地域の連携協働の仕組みづくりと地域の「つながり」創成の仕掛けづくり等は、創造的で実効性高い先進実践として参加者、特に学校教職員にとって貴重で、示唆に富むものであった。最後に森本晋也館長が指導助言を行った。



・ 後半はカフェ形式による班別ワーク（協議・意見交換）「地域ぐるみの防災教育アイデアと学校や教員の役割」を行った。事前探求課題として、各学校の防災教育実践や効果性・必要性、着手・実施容易性をふまえた取組提案を課していたこともあり、和やかで居心地の良い雰囲気の中で、各自の提案や考えを開示・共有し、活発、真剣で熱を帯びたカフェが展開された。最後に全体で共有し、長門市教育委員会学校教育課の原田健一郎課長が講評と研修のまとめを行った。



##### 【第2日（11月10日）長門市「青海島共和国」】

・ 研修会場を、閉校した小学校を「まちづくり」「ツーリズム」事業施設として、9 千万年前の火山活動や活断層の上にある施設として活用・再興した施設に移して行った。2 日目からの参加者も多く賑やかな研修となった。

・ はじめに、「青海島共和国と地域の活性化 ～地域の課題解決と学校への期待～」と題して、青海島共和国の濱野達男代表が講演を行った。88 年の人生や歩みを振り返りながら、地域に対する誇りや愛着、活性化に向けた熱い思い、住民を中心に据えた公共論、住民参画



- と地方自治のあり方を説く感動的な講演であった。笑いあり、涙あり、感動あり、深い学びありの1時間となった。
- ・その後、施設見学ツアーを行い、国会議事堂、迎賓館、国立博物館、官庁施設や図書・歴史館等の説明を受けた。学校統廃合が進み、閉校・休校する学校も増えている中、その後の施設の利活用や地域コミュニティ形成のあり方についても学ぶべきことの多い時間となった。
  - ・続いて、青海島共和国副代表で、NPO法人山口県防災・砂防ボランティア協会の伊藤信行理事が、「土砂災害から命を守る ～災害は忘れた頃にやってくる→災害は忘れてならないへ！～」と題した講義を行った。土砂災害に関する広報啓発用パネルを多数用意し、土石流、地滑り、崖崩れの実相から命を守ることの大切さ、危険予知の考え方やスキルまで幅広い内容が網羅された専門研修であり、2日間の研修行事を締めくくる総括的な学びの場として有効であった。
  - ・最後に、NITS山口大学センターの和泉研二センター長が閉会挨拶を行い、研修行事を終了した。



## 成果：

研修項目・内容ごとの「学びの整理」を e-メールで提出させ、参加者の変容を学びの実感、自身への問いかけと今後への意識から見取った。満足度は極めて高かったが、ここでは参加者の「学びの整理」を一部紹介する。

### 【第1日（11月9日）山口県油谷青少年自然の家】

- ・心に残ったのは「防災で大事なものは日頃の生活」ということです。「フェーズフリー」という言葉を初めて知って、日常の習慣や生活が非常時に生きてくると感じました。そのような視点をもって、子どもたちの指導や支援を行います。また、子どもの印象に残る防災教育は、子どもが課題意識をもつ、子どもが主体的である、家庭・地域も連携することが大事と学び、この3つは防災教育に限らずどの教育でもそうだと気づかされました。（小学校）

- ・これまで防災教育に対しての意識が低かった。櫻井校長先生や藤本主任の実践を聞き、より実効性のある防災教育の実践を重要だと感じた。特に教員主導型の避難訓練の脱却の重要性を認識した。教員の指示のもと訓練する防災教育を当たり前のように行ってきたし、何ひとつ疑問に感じてこなかったことを恥ずかしく感じた。生徒・教職員が当事者意識をもち、どのように行動すればよいかを考える防災教育を広めたい。（中学校）

- ・中学校、高校、教育委員会、大学の先生方と小学校の私と、校種や立場の異なる集まりとなった。だからこそ、災害があった時や災害に備えるための協議の中で、管理職として情報をいち早く収集し適切なリーダーシップを図るための視点、担任として子どもたちを動かすための視点や備蓄の視点等、まさしくチームとしてどう役割を果たすかをそれぞれに出しあい協議することができた。（小学校）



### 【第2日（11月10日）長門市「青海島共和国」】

- ・感動が大きかった。研修は知識や手法を学ぶものと考えていたが、このように心震わされる研修は貴重と感じる。地域の人の声が加速装置となり、取組の規模が大きくなった結果が青海島共和国なのだと思うと、どの地域にも可能性があると思った。それを見つけ出し、一歩踏み出すかどうかが重要である。組織開発までの道のりや、組織を維持していくための取組等から得ることも多く、様々な面から学びの多いお話だった。（高校）

- ・ツアーでは島の地層や地形の歴史について詳しくお聞きでき、職業として専門性を極めてこられた方のお話は大変大きな学びとなった。災害は突然起こるものではなく、土地や気象等の変化や影響によって起こるもの。ということは、地域の情報や専門機関から出される情報に、きちんとアンテナを働かせて、防災の意識を一人一人がもっておく必要があるということ。自助・共助と言われるが、公助の視点も入れながら、知識と情報を敏感にキャッチしておく大切さを改めて気づかせていただいた。（小学校）

## 「NITSからの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

- ・今回の「カフェ」は、「出発地」を参加者（勤務校）とし、その現状、成果や課題を研修担当者として想像し、新たな取組（提案）を事前探求させた上で、「目的地」を防災力・防災教育力に関する参加者（勤務校）の新たな気づきや変化（力量形成・深化）とする「知識・技能習熟型」研修として取り組んだものである。

- ・「共通言語①～③」では企画・編成段階での「戦略」、参加者の見取りと力量形成過程の重視と日々の教育実践の省察の「見える化（事前探求課題等）」が、「同④」では研修時間・場と学びの雰囲気づくり（カフェ）が、「同⑤」では学び合いのコミュニティとしての継続的・親和的な関係性づくりが大切であることを学んだ。

## アイデアや工夫したこと：

- ・研修の企画編成から運営にあたり、「カフェ（形式）」の魅力である心地よさ、落ち着き、温かさや連帯的空気感を大切にすることとし、ゆとりある時間や環境（集いやすい場所やゆとりある広さ）を確保するよう努めた。

- ・研修講師には、日々の教育実践に対して、情熱をもって取り組んできた専門家、地に足のついた実践家、感動を伝え切れる話者を招聘し、日々の教育実践への還元に加えて、参加者自身の感動体験、資質能力の向上や「学び続ける教師」としてのキャリア形成に資することを期待した。

- ・カフェでは、本学「ちゃぶ台方式＝カフェ形式」のノウハウやワークツールを活かすよう努めた。参加者の階層、所属、経験年数等による「上下」「一方的」関係を防ぎ、立場、経験や校種を乗り越えて支持的・肯定的で協働の空気感の中で協議や交流が進むよう配慮した。